

【論文】

## 保育者志望学生の「運動有能感」に着目した一考察

橋本真理子<sup>1</sup> 松田 広<sup>2</sup>

A focused study on physical competence of nursery students.

Mariko Hashimoto, Hiroshi Matsuda

### はじめに

2019年度のスポーツ庁全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書の小学生の調査結果によると、基礎調査（クロス集計）において、「運動やスポーツが好き」と答えた子どもほど体力・運動能力が高く、「達成感」「挑戦している」「自己肯定感」の項目の「当てはまる」という値も高い。また、授業での話し合いや助け合いも積極的に行っているという認識結果が見られた。中学生の調査結果でも同じような傾向が見られた。つまり、運動やスポーツが好きであることや好きになることが、体力・運動能力が高いだけでなく、運動やスポーツの場面において達成感・挑戦・自己肯定感といった自分自身の「自信」へと繋がると捉えられるのではないだろうか。

また、同調査において小学校入学前の外遊びの実施頻度が高いほど入学後の運動やスポーツの実施頻度が高く、体力も高い傾向にあることが明らかになっている。このことは、幼児期の運動習慣や運動経験が子どもの体力・運動能力に大きく影響していると言える。

杉原ら（2004）は、子どもの運動能力の発達について、運動経験が直接的に影響を及ぼしていることを報告している。また、間接的な影響としては、心理社会的環境（遊びの友達の数、家族構成、親の意識など）や物理

---

1 九州大谷短期大学幼児教育学科

2 福山平成大学大学院スポーツ健康科学研究科

的環境（遊び場の有無、運動遊具の数など）が報告されている。このことから、保育者は、子どもの体力・運動能力の発達に直接的にも間接的にも関わりや影響をもっていると考えられる。

これらのことを背景に考察すると、幼児期において運動あそびや外遊びが好きな子どもほど運動経験や運動頻度が多く、その繰り返しや継続は子どもの体力・運動能力の向上のみならず、子ども自身の「自信」に繋がっていくのではないだろうか。つまり、保育を実践する保育者の役割や力量が子どもの心身の発育・発達に大きく影響することが伺える。

及川（2012）は、保育者養成校の女子学生を対象に運動指導に対する自信に関連する要因を検討し、学生が自己の運動能力や運動技能に対して肯定的に認知したり、運動場面で教師や仲間から受け入れられていると認知したことが運動指導に対する自信を高めたと述べている。さらに及川（2014）は、保育者志望の女子学生100名を対象に、運動有能感「運動場面における自信」の実態把握とともに運動指導に対する自信への影響要因である身体的有能さの認知と受容感に着目した検討を行い、身体的有能さを低く、受容感を高く認識する傾向を認めている。

では、K短期大学幼児教育学科の学生はどうであろうか。その多くが保育者を志望しているが、子ども達の運動指導や支援に直結する役割を担う学生にとって、自身の運動やスポーツに対する認識がどのようなものであるかを検討することは、学生自身の課題を明らかにするとともに、大学の授業改善の観点からも意義深いと考える。

## I 研究の目的と方法

### 1. 目的

本研究は、保育者を志望する学生の「運動有能感（運動場面における自信）」を指標にした意識調査を実施し、その結果をもとに運動有能感の3因子①「身体的有能さの認知」②「統制感」③「受容感」からの分析を行い、学生の実態把握をするとともに成果と課題を考察することによって、授業

改善の一助とする。

## 2. 方法

### (1) 先行研究・文献研究

「運動有能感」に関する概念の整理と先行・文献研究

### (2) 調査対象者：K短期大学幼児教育学科1年生

2021年度「保健体育・体育実技」履修者78名

### (3) 調査方法

「運動有能感」に関する調査（2021年9月実施）

（高橋健夫著「体育授業を観察評価する」明和出版2003 p 163を元に調査票を作成。無記名）

### (4) 関係資料の収集・分析

### (5) 実践の分析・考察

データの分析には、統計ソフトSPSSプロマックスを使用し、尺度を得点化した後、T検定、一要因分散分析を行った。なお、有意水準は5%とした。収集されたデータからケース分析を行い、その結果から成果と課題を考察し、「運動有能感」の概念を視点にした学生の姿を描き出すことにした。

## II 「運動有能感」とは

「運動有能感」は、岡澤ら（1996）が提唱したもので、「運動場面における自信」と定義している。運動有能感を構成する因子として、①自己の運動能力に対する肯定的認知である「身体的有能さの認知」、②努力や練習によって運動をどの程度遂行できるかという認知である「統制感」、③運動場面で仲間や教師から受け入れられているという認知である「受容感」の3因子で構成されている。さらに岡澤（2003）は、「運動を継続する上で、運動することが楽しいから運動に参加するというように内発的動機づけに基づいて参加することが重要」と述べている。また、デシ（1980）は、「内発的動機づけ」を「有能さと自己決定」と定義し、杉原（1995）や岡澤（1996）

は、「内発的動機づけは、運動有能感の高まりによって強められる」と述べている。

さらに松本（2004）によると、運動有能感と運動参加に関しては、運動を好む者は積極的に運動に参加し、そこで得られた有能感により、さらに運動に取り組むようになるとの報告がなされている。

これらのことから、学生自身が楽しく運動と関わり、運動を継続することが必要であり、そこに向かわせるためには、自ら主体となって運動に関わり、運動有能感を高めることが重要であると捉えることができる。そして、この運動有能感を高めることが保育者志望の学生にとっての大きな力になると推察される。

### Ⅲ 「運動有能感」に関する調査

#### 1. 調査の実際

学生の性別及び中・高・現在の運動及び文化活動経験 表 1

性別	人数		中学：経験	高校：経験	現在：実施
男性	2	運動系	43 (名)	29	10
女性	75	文化系	29	27	1
合計	77	なし	5	21	66

※対象者78名中1名は不実施

「運動有能感」に関する調査は、フェイスシート（表1：学年、性別、中学・高校・現在の運動・文化活動経験の有無）の記入と岡澤ら（1996）が作成した「運動有能感テストの運動有能感尺度の質問紙調査（表2）を実施した。

幼児教育学科1年生、「保健体育・体育実技」履修の77名に実施し、中学・高校の運動・文化活動経験については、学校の部活動及び外部や習い事等の活動を含んでよいことを説明した上で回答してもらった。

また、倫理的配慮として対象者全員に質問紙への回答前に本研究の趣旨、無記名であり個人が特定されることがないことを説明し、同意できる人に

回答を求め、記入してもらった。

表2

運動有能感に関する調査					
この調査用紙には、運動についての文章をあげてあります。それぞれの質問について、自分に当てはまると思う番号に○をつけて下さい。この調査は、あなたの成績とは関係ありません。					
1 まったく当てはまらない 2 あまり当てはまらない 3 どちらともいえない 4 やや当てはまる 5 よく当てはまる					
①運動能力が優れていると思います。	1	2	3	4	5
②たいいの運動は上手にできます。	1	2	3	4	5
③練習をすれば必ず技術や記録は伸びると思います。	1	2	3	4	5
④努力さえすれば、たいいの運動は上手にできると思います。	1	2	3	4	5
⑤運動をしている時、先生が励ましたり、応援してくれます。	1	2	3	4	5
⑥運動をしている時、友達が励ましたり、応援してくれます。	1	2	3	4	5
⑦一緒に運動をしようと誘ってくれる友達があります。	1	2	3	4	5
⑧運動の上手な見本として、よく選ばれます。	1	2	3	4	5
⑨一緒に運動する友達があります。	1	2	3	4	5
⑩運動について自信を持っている方です。	1	2	3	4	5
⑪少し難しい運動でも、努力すればできると思います。	1	2	3	4	5
⑫できない運動でも、諦めないで練習すればできるようになると思います。	1	2	3	4	5
この調査用紙は高橋健夫編著「体育授業を観察評価する」明和出版（2003）p.165の調査用紙を元に作成した。					

## 2. 結果と考察

### (1) 全体の結果と考察

運動有能感に関する調査結果 (名) ※合計77名 表3

質問 \ 回答	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12
まったく当てはまらない	15	7	1	4	1	0	6	28	9	20	3	2
あまり当てはまらない	16	22	5	8	3	2	10	26	13	20	17	6
どちらもいえない	27	22	13	16	25	8	17	18	22	19	21	20
やや当てはまる	17	23	40	38	38	42	29	4	15	14	29	39
よく当てはまる	2	3	18	11	10	25	15	1	18	4	7	10

(点) 表4

質問	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12
合計	206	224	300	275	284	321	268	155	251	193	251	280
平均	3.12	3.39	4.55	4.17	4.30	4.86	4.06	2.35	3.80	2.92	3.80	4.24

運動有能感に関する調査の集計結果を表3に示した。また、各項目の選択肢を得点化（よく当てはまる：5，やや当てはまる：4，どちらともいえない：3，あまり当てはまらない：2，まったく当てはまらない：1）し、それぞれの合計・平均値を算出し表4に示した。図1には各質問項目の平均値を示した。

また、岡澤ら（1996）が作成した「運動有能感テストの運動有能感尺度の質問紙は下位尺度として、「身体的有能さの認知：自己の運動能力に対する肯定的認知」、「統制感：努力や練習によって運動をどの程度遂行できるかという認知」、「受容感：運動場面で仲間や教師から受け入れられているという認知」があり、3因子とも各4問（全12問）で構成されている。それぞれの質問と運動有能感3因子の関係については表5にまとめた。

さらに、3因子の合計の平均値、中央値、標準偏差、分散、最小値、最大値等の全体集計を表6に示した。

「運動有能感」に関する調査の平均値 図 1

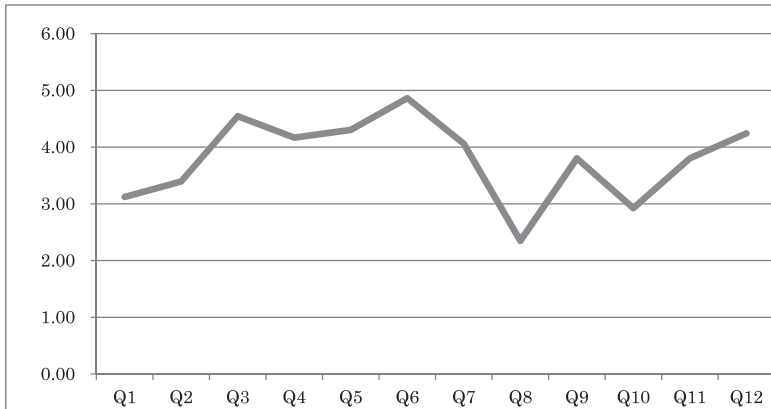


表 5

質 問	「運動有能感」 3 因子
Q1.Q2.Q8.Q10	身体的有能さの認知（自己の運動能力に対する肯定的認知）
Q3.Q4.Q11.Q12	統制感（努力や練習によって運動をどの程度遂行できるかという認知）
Q5.Q6.Q7.Q9	受容感（運動場面で仲間や教師から受け入れられているという認知）

ここで、運動有能感 3 因子の学生の認知について、全体集計結果（表 6）の平均値をもとに因子ごとに考察してみたい。

「身体的有能さの認知」については、平均値が11.35と他の 2 つの因子に比べて低い傾向にあり、学生は自分の運動能力に対して、特に Q 8（運動の上手な見本としてよく選ばれる）、Q10（運動について自信を持っている）については図 1 で示されたように肯定的認知は低いと考えられる。

「統制感」については、平均値が14.36と 3 因子の中で最も高く、努力や練習によって運動をどの程度遂行できるかという肯定的認知が高いと考えられる。

また、「受容感」については、平均値が13.35で、特に Q 6（運動している時、

友達が励ましたり応援してくれる)と認識している学生が67名(よく当てはまる25名、やや当てはまる42名)と、約87%の学生が高い認識を感じていることから、運動場面で仲間や教師から受け入れられているという肯定的認知が高いと推察される。

全体集計

表6

		統 計 量			
		身体的有能さの認知	統制感	受容感	総合得点
度数	有効	77	77	77	77
	欠損値	0	0	0	0
平均値		11.35	14.36	13.35	39.06
平均値の標準誤差		0.452	0.378	0.295	0.983
中央値		12.00	15.00	13.00	40.00
最頻値		12	16	13	40
標準偏差		3.970	3.316	2.589	8.624
分散		15.757	10.998	6.704	74.377
範囲		16	16	12	36
最小値		4	4	7	22
最大値		20	20	19	58
合計		874	1106	1028	3008

しかし、ここで注目しなければならないのはそれぞれの項目で、「全く当てはまらない」「あまり当てはまらない」と回答した学生の存在である。特に、「身体的有能さの認知」の項目が多いことや、「統制感」Q4(努力さえすれば、たいていの運動は上手にできる)と認識していない学生の存在は、運動能力の問題も考えられるが、同時に体育実技や身体表現技術等の授業の工夫・改善の必要性を認めなければならない。

さらに気になるのは、「受容感」の項目のQ7(一緒に運動しようと誘ってくれる友達がいる)、Q9(一緒に運動する友達がいる)という項目である。これらが低い学生への対応は、人間関係の問題も関係している可能



性が考えられ、大きな課題の一つである。この点については筆者も以前より認識しており、グループ編成（毎時間ごとに数字や誕生月等を用いた無作為編成）や1時間完結型授業の工夫などの授業研究を継続中である。

この調査の結果からみたこれらの課題は、本研究だけでは検証できないため、今後の検討で明らかにする必要がある。

## (2) コースごとの比較分析と考察

表7は、幼児教育コースと児童福祉心理コース（\*以下本論文においては「保育心理コース」と表現する）の学生の運動有能感3因子について集計し比較したものである。（但し保育心理コースには授業クラス編成の関係で3名の幼児教育コースの学生が含まれることを付け加える）

コースごとの集計

表7

グループ統計量						
運動有能感3因子	クラス	人数	平均値	標準偏差	P	平均値の標準誤差
身体的有能さの認知	幼児教育コース	39	10.72	4.000	n.s.	0.640
	保育心理コース	38	12.00	3.883		0.630
統制感	幼児教育コース	39	13.56	3.226	*	0.517
	保育心理コース	38	15.18	3.245		0.526
受容感	幼児教育コース	39	12.92	2.659	n.s.	0.426
	保育心理コース	38	13.79	2.473		0.401
総合得点	幼児教育コース	39	37.21	8.633	n.s.	1.382
	保育心理コース	38	40.97	8.297		1.346

※ p < 0.05

図2

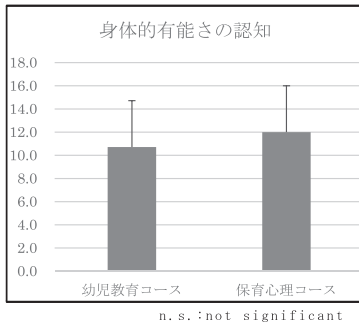


図3

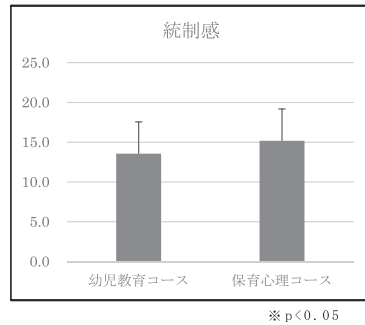


図4

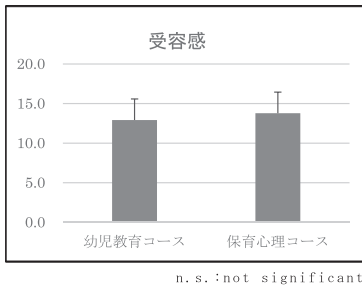
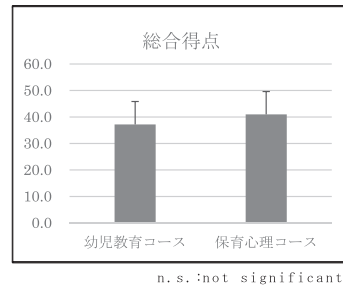


図5



<統計処理について>

n.s.=有意差なし ※見た目上数字に差があるが統計上差がない(たまたま結果がそうなった誤差範囲)

\* p<0.05 有意差あり(95%信頼) ※5%は誤差があるかもしれないが差があると言ってよい

図2～図5は、運動有能感3因子ごとの統計処理を行い、幼児教育コースと保育心理コースの有意差を出したものである。結果から考察すると、2つのコースに大きな差は見られないが、細かく分析すると、「身体的有能さの認知」「受容感」「総合得点」については、統計処理上、n.s.=有意差なし(見た目上数字に差があるが統計上差がない/たまたま結果がそうなった誤差範囲)という結果である。

しかし、「統制感」については、幼児教育コースより保育心理コースの方が有意差がみられた。(P<0.05) このことについて考察してみたい。

統制感は、努力や練習によって運動をどの程度遂行できるかという認知であるが、保育心理コースでは、心理学に関わる授業が幼児教育コースより多く、心理を深く学びたい学生が多く在籍している。動きや運動そのものだけでなく、そこに向かう過程を深く追求することを意識したり好んだりする傾向の学生が幼児教育コースより多いのではないかと推察される。しかし、本研究だけでは検証できないため、今後検証する必要がある。

コースごとの運動有能感3因子の比較分析の結果、2つのコースに大きな差は見られなかったが、「統制感」の傾向の違いを認識した上で今後の授業等に活かすことが必要であろう。

#### IV まとめと今後の課題

本研究の目的は、保育者を志望する学生の「運動有能感（運動場面における自信）」を指標にした意識調査を実施し、その結果をもとに運動有能感の3因子①「身体的有能さの認知」②「統制感」③「受容感」からの分析を行い、成果と課題を考察し、学生の実態把握をするとともに今後の授業改善の一助とすることであった。

結果と考察から、本学の幼児教育学科の学生の運動有能感「運動場面における自信」の実態把握としては、「身体的有能さの認知」が低く、「統制感」「受容感」の認知は高い傾向にあることがわかった。これは、及川(2014)が保育者志望の女子学生100名を対象に、運動有能感の実態把握とともに運動指導に対する自信への影響要因である身体的有能さの認知と受容感に着目した調査結果である身体的有能さを低く、受容感を高く認識する結果と同傾向である。このことから、保育者志望の学生は、運動有能感「運動場面における自信」において「身体的有能さの認知」が低く、「受容感」の認知は高い傾向にあると推測される。

課題としては、運動有能感の3因子が低い学生や「運動」「人と一緒に

活動する」こと等に苦手意識を感じる学生に対して、「運動有能感」や「自己肯定感」が高まるような授業を工夫・検討していくことが重要であることが明らかになった。

松田・橋本ら（2019）は、高等学校の普通科と体育・スポーツコースに在籍する生徒の学科別・性別・学年別の運動有能感に関する調査を行い、これらの差異を明らかにするとともに体育授業への課題を提案した。また、橋本（2020）は、運動有能感に着目して子どもの身体表現を支える保育者を目指した授業について考察している。いずれも運動有能感を指標としての調査研究を通して、授業改善に向けての検討の重要性を述べたものである。

今後も子どもの運動や身体活動を支える保育者志望の学生の授業改善に向けて検討すること、さらには、子どもの保育活動へのつながりを重視した研究を継続して深めていきたい。

### 【引用文献・参考文献】

- 1) スポーツ庁「令和元年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書」（2019）第3章基礎集計，小学校児童の調査結果，中学校生徒の調査結果
- 2) 杉原隆・森司郎・吉田伊津美（2004）「幼児の運動能力発達の年次推移と運動能力発達に関与する環境要因の構造的分析」平成14～15年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書
- 3) 及川直樹（2012）「保育者養成校における学生の運動指導に対する自信の実態と関連要因の検討」幼児体育学研究4（1），PP41～52
- 4) 及川直樹（2014）「女子短期大学生の運動有能感の実態と関連要因の検討～身体的有能さの認識と受容感に着目して～」飯田女子短期大学紀要pp145～151
- 5) 岡澤祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎（1996）「運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究」スポーツ教育学研究16（2）：pp.145～

- 6) 岡澤祥訓 (2003) 「子どもの運動有能感の変化をみる. 高橋健夫編著 体育授業を観察する. 明和出版 : pp.27-30.p165
- 7) E.L.Deci : 安藤延男・石田梅男訳 (1980) 「内発的動機づけ－実験社会心理的アプローチ」 威信書房  
〈Deci, E, I (1975), Intrinsic movivation. plenum Press : New York.〉
- 8) 杉原隆 (1995) 「体育学習の動機づけ. 宇土正彦監修 学校体育授業辞典」 大修館書店pp.161-163
- 9) 岡澤祥訓他 (1996) 「運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究」 スポーツ教育学研究16 (2) pp.145-155
- 10) 松本裕史・竹中晃二 (2004) 「運動有能感と定期運動行動の関連について」 健康支援 6 pp.1-7
- 11) 松田広・橋本真理子他 (2019) 「高等学校に置ける運動有能感に着目した普通科と体育・スポーツコースに関する一考察」 福山平成大学福祉健康学部紀要pp.93-99
- 12) 橋本真理子 (2020) 「子どもの身体表現を支える保育者を目指した授業の一考察～運動有能感に着目した学生の意識調査を通して～」 九州大谷研究紀要pp.63-65